



戦争体験聞き取り

特攻隊員・林市造

『新修宗像市史』現代部会から

零戦で壮烈な死

特攻隊員・林市造海軍少尉（没後大尉に昇進）。宗像市では、この人においては先の大戦は語れない。次姉・博子（故人）が編んだ遺稿集『日なり楯なり』（権歌書房）などいくつかの資料を読んだうえで、親友だった秀村選三・九大名誉教授（福岡市）に話を聞きました。

市造は大正11（1922）年2月の生まれ。出生地は福岡市です



海軍飛行予備学生時代の
林市造（秀村選三氏提供）

が、父・俊造は旧赤間町、母・まつゑは旧吉武村の生まれです。東京帝大農学部助手だった父は、市造が2歳のときに事故死しました。そのため母子は実家に帰りました。市造は吉武小に入学。同小5年修了後、福岡市の小学校に転校して旧制修猷館中学へ進学。旧制福岡高校から戦時中の昭和17（1942）年、京都帝大経済学部に入學します。

しかし戦局が厳しくなり、市造は翌18（1943）年末、学徒出陣で佐世保第2海兵団に入団。土浦（茨城）出水（鹿児島）元山（朝鮮）へ転属。短期間の訓練を経て同20（1945）年4月4日、戦闘機・零戦で進発。翌日、鹿屋（鹿児島）の航空隊へ到着します。僚機よりも先に、市造の搭乗機だけ

が着陸したので、彼が一流のパイロットだと感じた宇垣纏（まとも）中將は「あの若者が長く生きられないのが残念だ」と参謀長に語りかけたそうです。

市造は同月12日13時すぎ、第2七生隊17機の一員として鹿屋から出撃。15時すぎ、与論島東方の米海軍空母機動部隊に突入。特攻隊員として、わずか50日目の散華（さんげ）でした。

母への深い思い

市造は母にならってクリスマスチヤンでした。出撃前、母への手紙には吉田松陰の一首

親思ふ心にまざる親心

今日のおとずれ何ときくらむを引用したあと、母をおいて死んでゆくのがつらいと書き、こう締めくくっています。

「この頃、毎日聖書をよんでいます。よんでいると、お母さんの近くに居る気持ちがするからです。私は聖書と讃美歌を飛行機につ

んでつつこみます」

この手紙は、ロンドンで刊行された『Letters to Mother』に、ナポレオンなど歴史上の人物にまじって、日本人として唯一採用されています。それを発見したのは、秀村さんの兄で東大名誉教授の欣二です。

秀村さんもクリスチャン。市造とは旧制福岡→京都帝大の学友で、海軍飛行予備学生の同期です。それだけに市造への思いは痛切でした。

「彼は信仰心が厚く、聖書研究会などに参加し、学徒出陣前、京都のキリスト教墓地を歩き、墓標の聖句『主を信ずる者／死するとも／生くべし』から、死の意味を語り合ったことが忘れられない」と語っています。

市造は陸軍入りを望んだ母に反して海軍を選びました。しかも特攻隊員を志願し、操縦技術が抜群と評価され、第一線に出たのです。「特攻隊員を志願するかどうかは、三つの選択肢がありました。

彼は強く志願しました。それは『意地』というものでしょう。健康を損なって佐世保に戻される私に、彼は何度も言いました。『航空隊に入ったといっても心配しないでくれ、と母に伝えてほしい』と。秀村さんはそう語ります。

しかし、母への手紙には、意地とは裏腹な思いがつづられています。

「おかあさん、(略)悲しいときは泣いてください。私も悲しいから一緒に泣きましょう」

鋭い批判力も

他方、市造の鋭い批判力に秀村さんは注目します。同年3月19日の日記には

「(略)世にもてはやされる軍人も、政治家も、なんと薄っぺらな思慮なきものの多きことか。(略)枢要の地位に立つものは、殊に軍人は、その置かれたる位置に乗じて、許しがたき罪、赤子であること、民であることを忘れるという

罪をおかしてはいないのか」とあります。

彼は、これらの日記や手紙は焼き捨て、人には絶対見せないでほしいと、鹿屋基地からの手紙に書いています。

昭和40(1965)年夏、沖縄出張の帰りに奄美群島の与論島(沖永良部島間の上空で、機体が激しく揺れたとき、秀村さんは市造の最期の地はこの辺だと確信しました。

特攻関係の資料では、4月11日に鹿屋から出撃した別の特攻隊13機のうち1機が米軍の空母「ミズーリ」に突入。翌12日にも同艦は零戦の猛攻を受け、1機を前方約100メートルで撃墜しました。日本側の記録ではこの日、第27生隊が突入したとされ、その中には市造の搭乗機も含まれていたのです。

ただ『母への遺書―沖縄特攻林市造(弦書房)を書いた福岡出身のノンフィクション作家・多田茂治は「(特攻隊員の死を)忠君愛

国の色で染め上げて物語ることとは、歴史の偽証ではあるまいか」と警告しています。

同書によると、博子は市造亡きあと、母まつゑは「髪が真っ白になり(略)母の前で市造さんのことを口にする」と狂ったようになった」と書いています。長姉・千代(福岡市に健在)もそう証言しています。

「絶対非戦」こそ

市造の葬儀は昭和21(1946)年8月5日、旧赤間町徳重の家に母が「林市造」の門標を掲げて営まれ、秀村さんが弔辞を述べました。

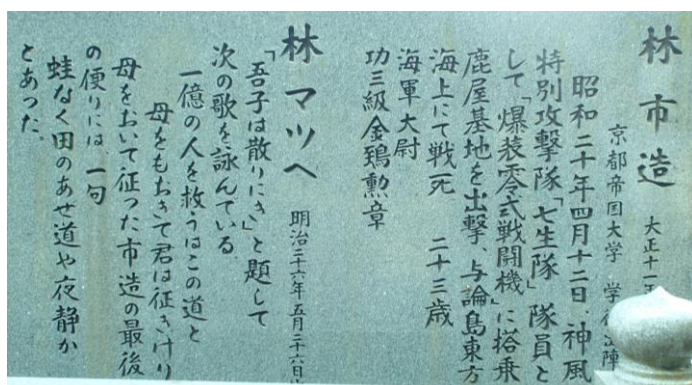
秀村さんは平成12(2000)年4月、沖縄からの帰りに沖永良部島に立ち寄り、岩場から東方海上に向かって「林！ 林！ 林！ 来たぞ！」と叫びました。そして翌年発行の郷土誌「西日本文化」に寄せたエッセイで「特攻は狂気の果て」と弾劾し「絶対非戦こそ、

亡くなった友に応えることだ」と主張しています。

林家の墓地には、市造の弟・満喜雄が立てた墓標の横に墓碑があり、市造の経歴と、まつゑの歌が刻まれています。

一億の人を救うはこの道と母をおきて君は征きけり

(現代部会 大垣堅太郎)



林市造と母まつゑの墓碑
(宗像市徳重の墓地。「マツヘ」は戸籍名)